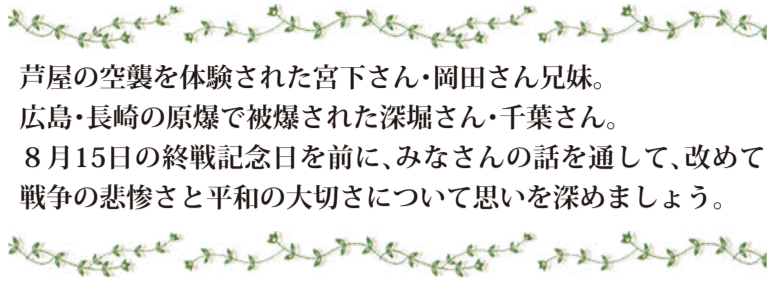


# みんなで考える 平和

問い合わせ 人権推進課 ☎38-2055



芦屋の空襲を体験された宮下さん・岡田さん兄妹。  
広島・長崎の原爆で被爆された深堀さん・千葉さん。  
8月15日の終戦記念日を前に、みなさんの話を通して、改めて戦争の悲惨さと平和の大切さについて思いを深めましょう。

## 戦時中の芦屋

宮下 清氏・岡田 保子氏

戦争当時、宮下氏・岡田氏は、若宮町で空襲を体験。

### 戦時中印象深かったこと

(宮下) 当時は中学生でしたが、勉強どころではなく、身体を訓練するため昼間だけでなく夜間もたくさん歩く、行軍(※1)をやっていました。

(岡田) 私は小学生で普通に授業を受けていましたが、警報が鳴れば、すぐに授業は中止になり、家に帰ります。給食もなくなるので、パンだけ配られて持って帰るのだけど、当時パンはまだ珍しくて、これは嬉しかったね。

私が子どもながらに怖いと思ったのは、近所の同級生が打出浜で機銃掃射(※2)で殺されたこと。

もう一つは、母が、畑から帰ってくる途中に飛行機に追われて、撃たれそうになって、屋根のある門の中に入って助かったということです。



岡田 保子氏 (80歳)

### 忘れられない1945年8月5日

(岡田) 8月5日、空襲で家の防空壕に入っていたら外にいる父から、「出て来い」と言われ、出ると座敷や洗濯物が燃えていて、その中を母に手をつないでもらって浜の畑まで逃げましたね。焼夷弾(※3)の火が点々と燃えていました。

(宮下) 油脂焼夷弾が落とされて、火のついた塊が散っていて。座敷の畳・ふすま・天井に点々と火のついた油脂がへばりついて、それが燃えて一面火の海だった。

(岡田) 早く避難したので、逃げる道はまだ燃えてなかったから、逃げることができました。

(宮下) 逃げるのが20分遅れていたら...

(岡田) 逃げる道がなかったね。

(宮下) B29がぐぐっと低く飛んでいるのが見えましたよ。警報は1回鳴ったらそれっきりでした。

### 戦時下の教育

(宮下) 軍事教練(※4)が月曜から土曜までこの中学校でもあったと思います。そのうち1回は体操、他は教練をします。1・2年生は兵隊の分列行進の練習、3年生は銃剣術、4・5年生になったら払い下げの三八銃で実際にそれを

持って掃除の仕方とか撃ち方などを習い、5年生は本当に実弾射撃の訓練もあった。本当の軍隊のような感じだね。

私のいとこが3人戦死しました。1人は昭和13年(1938年)に戦死。ニューギニアで1人戦死。それともう1人は潜水艦でシンガポールを出ただけで後は分からなくなりました。



宮下 清氏 (87歳)

### 戦争を終えて、平和を語り継ぐ

(宮下) 戦後は家が焼けて何もなくて、廃材を利用して建て直した小屋に住んでいました。

私たちの時代は生まれた時から戦争だったから、それがあたりまえだった。男だったから、大きくなったら戦争に行くものだと思っていたんです。今の子どもたちは幸せだと思います。

(岡田) もう戦争は絶対に嫌ですね。それは叫びたい。経験している者が言っていないといけない。

(宮下) そのとおりですね。

【注釈】※1 行軍：軍隊等が隊列を組んで長距離を行進・移動する。 ※2 機銃掃射：航空機などが装備した機関銃や機関砲を使用して、地上または海上の敵をなぎ払うように射撃する。 ※3 焼夷弾：家屋・物資の焼き払いや火災による人員殺傷を目的とした、焼夷剤が入った爆弾。 ※4 軍事教練：大正15年～昭和20年まで、中等程度以上の男子学校に陸軍現役将校を配属して行った軍事に関する訓練。

## 原爆の体験

深堀 輝行氏・千葉 孝子氏

深堀氏は、長崎で小学校5年生の時に爆心地から0.5 kmの防空壕で被爆。千葉氏は、広島で3歳の時に爆心地から2.5 kmの実家で被爆。

### 防空壕に飛び込んだ

(深堀) 自宅から少し歩いたらこの絵の防空壕に辿り着くんです。原爆投下時は、防空壕に飛び込んで助かったんです。入り口に座っていた叔父さんは、爆風で胸を打たれて一週間後に亡くなったんです。閃光は、はっきり覚えています。

(千葉) 閃光は浴びていなかったんですか？もしもともに浴びていたら火傷をしていますよね。



深堀さんが描いた当時の防空壕

(深堀) それはありませんでした。防空壕の前、家や木が遮蔽してくれました。本当に運が良かったと思います。空襲警報が解除されていたので、防空壕の前で遊んでいました。上空から音がして見上げると銀色にまぶしいほど光る一点。カンカンと警報が鳴って飛び込んだ瞬間、ピカッ、ドカンとすごい爆風でした。空襲警報が出されたままであったら、防空壕に避難していたはずだし、多くの命が助かっていたと思います。

(千葉) 広島の場合も、警報が解除になっていたから、みんな仕事に行ったり学徒動員(※1)に行ったりしてい

たんです。おそらく、8時15分が戸外に一番人が多くいる時間帯であることを確認して投下しているんですよ。

### 父母、3人の兄も亡くなりました

(深堀) 自分がこんな目があった時、それが原爆だと思わなかったんです。

(千葉) そんなこと全く知りませんから、母は家の裏庭に直撃弾が落ちたくらいにしか思っていなかった。外に出れば、誰かが助けに来てくれると。

(深堀) 父と母は原爆から半年ほどで亡くなりました。長男は実家の池の中で亡くなっていました。おそらく水が欲しくて池に入ったのでしょう。それを父が見つけたんです。半分生焼けの状態でしたが、名前が入った指輪があったので、自分の息子だと分かった。父が防空壕に戻ってきた時、泣きながら話をしてくれました。次男は旧制中学の学徒動員に行き、三男は遊びに行き結局帰って来ないままでどうなったかわからなかったです。母親が泣いていたこともよく覚えています。そして、夕方4時頃に黒い雨が降ってきたんです。油みたいでまともな雨でないんですよ。手に乗せてみたらやっぱり黒いんですよ。

(千葉) 放射能に汚染された塵を含んだ雨ですね。長崎の場合は雨が広範囲に降っているんですよ。

### 平和への願い

(千葉) 原爆に遭いながら、今生きていることは非常にラッキーな偶然の積み重ねだということです。

(深堀) 防空壕に飛び込んでいなかったら、確実に死んでいたと思います。私はここにいません。

(千葉) 私も家の中にいて助かった。戦争は、知れば知るほど残酷なことだと感じます。戦争はしてはならないことですね。

(深堀) 本当に考えられないことでした。絶対に戦争はやってはいけないですね。



左から、深堀 輝行氏(82歳)・千葉 孝子氏(75歳)

【注釈】※1 学徒動員：労働力不足を補うため、中等学校以上の生徒や学生が軍需産業や食糧増産に動員された。